

# 1950年代日本のデザイン状況

森 仁史

## はじめに

1955年(昭和30)2月、金沢美術工芸大学が認可された。この学校に即して見れば、1946年に金沢に生まれた美術工芸専門学校が、短期大学(1951)を経て、4年制大学になり、同時に今までの工芸科は産業美術学科に衣替えするという一連の変遷である。しかし、戦後日本全体から見ると、デザインを巡る大きな激変の年に、それに同期するような時機を得た変化だったのである。この変わり目をまとめてみると、次のようになる。

年	事項	関連事項
1950	4月 千葉大学工学部に工業意匠学科	6月 朝鮮戦争
1951	4月 東京芸術大学に工芸計画専攻、6月日宣美	1月 松下幸之助渡米、 9月 サンフランシスコ講和条約
1952	4月 産業工芸試験所、6月国立近美、7月JIDA	
1953	柳工業デザイン研究会	
1954	4月 京都工芸繊維大学に意匠工芸学科、 桑沢デザイン研究所	
1955	1月 『リビングデザイン』創刊 2月 第一回毎日産業デザイン展 日本生産性本部設立 3月 ル・コルビュジェ、レジェ、ペリアン展 5月 第一回国際貿易見本市 「国民車育成要綱案」 7月 日本住宅公団 8月 東通工「TR-55」(図1) 10月 「グラフィック'55」展(図2) 11月 ル・コルビュジェ来日 12月 R.ライト来日	2月 第一次重要無形文化財 3月 日本伝統工芸協会     8月 日本工芸会  11月 自由民主党
1956	6月 工業デザイン・アメリカ視察団	
1958	5月 通産省デザイン課	

## デザインの位置

日本は19世紀後半からヨーロッパを手本に近代国家建設に努力したが、工業的にはずっと後進国であった。貿易は工業原料を輸出し、工業製品を輸入していた。かろうじて、日常生活用品や繊維産業、つまり軽工業の一部を国際市場に送り出すことができる程度だった。常に貿易赤字、経済基盤の弱さに悩まされた。なかでも、製造品のデザインは国際水準から立ち遅れ、多くの場合は最新流行を模倣することに終始していた。

他方で、手仕事の技術は国際的にみて優れていたもので、これを輸出品として製品化することは明治以来一貫した国策だった。そのための留学制度(海外実業練習生)や指導機関(陶磁器試験所(図3)、工芸指導所)を設け、民間企業を後押しした。しかし、第二次世界大戦までこの貿易構造



図1



図2

を変えるに至っていなかったし、このために武力を使ってアジアに独占的な市場を獲得しようとした。

敗戦によって、負の途から脱却するには再度輸出品の振興に取り組まねばならなかったが、その基本は優れた工業製品をつくることであった。このために、技術開発が必要であり、



図3

同時に優れたデザインが求められることになった。戦前のうちにはこの需要は図案家が受け持っていたが、それはあくまでも表面的な装飾でしかなかった。彼らは構造や製造に携わらなかったから、戦後復興が本格化する1950年代にはこうした産業に密着したデザインの仕事に大きな要請、需要が生まれてきたのだ。巨視的に見ると、金沢美術工芸大学産業美術科はこうした趨勢にみごとに応えようとしていたのである。

### デザイン教育

戦前にもデザインは教育されていた。官学の東京美術学校(1896)、東京工業学校(1899)(図4)、京都高等工芸学校(1902)、東京高等工芸学校(1921)、そして最初の私学の帝国美術学校(1929)である。これらはすべて図案科であり、紙の上に描かれるデザイン原画だった。構造や製造技術を含めたデザインは家具以外では戦後に持ち越される。先にふれたように日本の製造業には、そうしたデザインを必要とするまでの国際競争力のある業種(繊維、陶磁器、漆器など)はごく限られていた。



図4 工業図案科教室

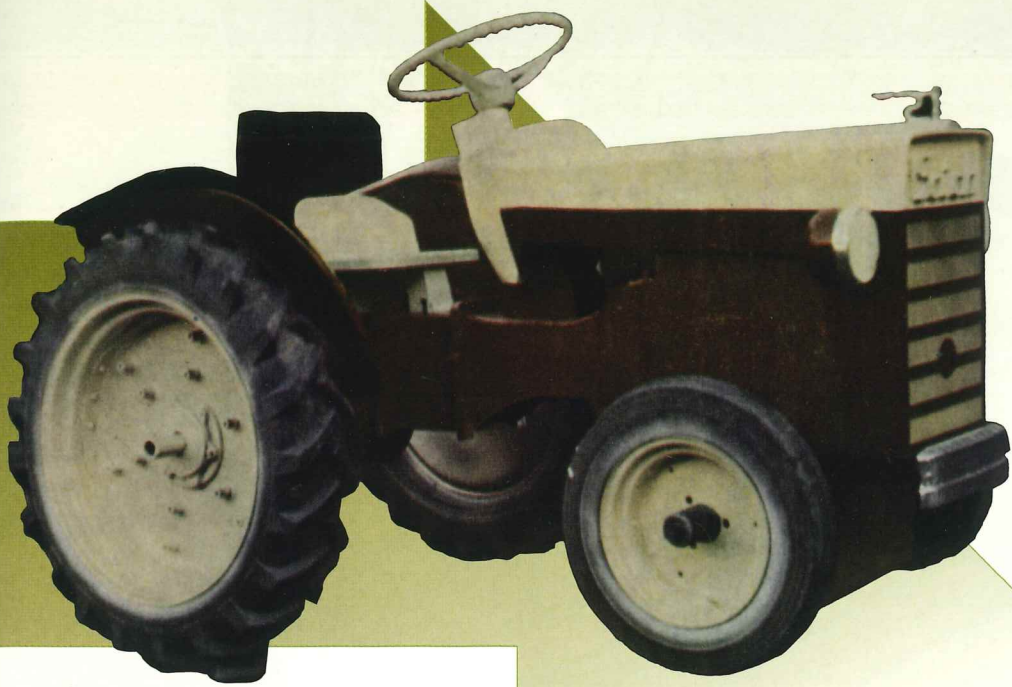
政府が戦後復興を工業振興に求めるに従い、これに必要な教育制度の整備がすすめられた。官学の千葉大学工学部、東京芸大、京都工芸繊維大学に工芸意匠、工芸計画といった名称の学科が生まれた。これらの学科では工業製品のデザインが意識された。私学では戦後も依然として殆どが図案科だった。こちらは戦後息を吹き返した広告業界に大きな需要があったからである。戦時統制がなくなって、多くの大衆が求めた消費財の市場には宣伝広告(ほとんどが活字メディア(図5))は必須であり、すぐれたデザインは何よりも強力な武器だった。デザイナーの組織もグラフィックが先んじており、その要を広告代理店が掌握する体制が築かれた。



図5 『平凡』1954

従って、金沢でも産業美術はグラフィックにまず需要が大きかったはずであるが、地場産業としての繊維、陶磁器からの新しいデザインを求める声も無視できなかった。工芸科からの転換は日本全土が産業化、輸出振興に大きく動きだしている時代のなかで、少なくとも地場産業への求めに応えようとする自治体運営の積極的な姿勢がうかがえる。それゆえに、きわめてドラスティックに工芸専門教員を削減してまで、現役のデザイナーであった大智浩、柳宗理を招く必要があったのである。学校はこうした地場の要請と国策としての産業デザイン振興の相乗の波にのっていたのではないか。これは今も大学が地域のなかで果たす役割を考えると踏まえておきたい歴史のように思われる。

(柳宗理記念デザイン研究所シニア・ディレクター)



# 1955・ 産業美術・発進

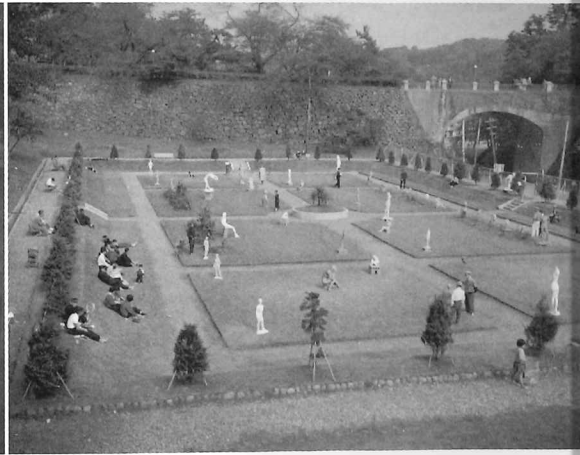
—金沢美術工芸大学のデザイン教育—



【写真上】森嘉紀、藤浦鋭夫、無量井三郎(4輪トラクター原寸木型模型)1960

【写真下】堤正弘(ポータブル・ミシン・デザイン)1958

食堂 購買  
土曜市民美術講座 体育祭  
卒業制作展 彫刻展  
撮影: 生田 圭夫



## 企画展示 「1955・産業美術・発進」展

発行日 / 2017年3月7日

編集 / 森仁史

展覧会担当 / 南有里子

データ作成補助 / 岡原美紀

輸送 / 株式会社インプレス

制作 / ヨシダ宣伝株式会社

発行 / 金沢美術工芸大学 柳宗理記念デザイン研究所

〒920-0902 石川県金沢市尾張町2-12-1

<http://www.kanazawa-bidai.ac.jp/www/contents/yanagisori/>